

(課程博士・様式7)

学位論文要旨

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名： 伊藤 佐奈美

論文題目： 軽度知的障害生徒における自己理解の支援に関する実証的研究

論文要旨：

知的障害者の自己決定やその基礎となる自己理解については、必要とされながらもそのための十分な実践がなされていない現状がある。本研究では、社会的な課題としてニーズの高い、就労を目指す特別支援学校高等部に在籍する知的障害の程度が比較的軽度な生徒への指導・支援に着目し、自己理解を促す支援の在り方を提案することを目的とする。特別支援学校高等部に在籍する生徒を対象に自己理解の支援に関する実証的研究を行い、支援事例から軽度知的障害生徒における青年期教育の課題を提起し、さらに、「自己理解」の内容を扱った集団学習の指導実践を報告し検討する。

第1章では、本研究において取り上げる軽度知的障害生徒の「自己理解」を「軽度知的障害生徒が他者や事物との関係性において、そこに生起するありのままの自己の感情の認識を含む自分自身の性格傾向や特性を知り、さらに意識したり認識したりするだけでなく、自分にふさわしい生き方や行動を理解すること」と定義し、その支援の在り方について研究を進めることとした。また、研究の背景として、特別支援学校高等部在籍生徒数の増加に伴い不登校など学校適応に関わる問題が増加していることや、職業訓練に偏りがちな特別支援学校高等部軽度知的障害生徒に対する職業教育の現状を踏まえ、軽度知的障害生徒の社会生活への適応や社会自立を図るためには、自己理解を促す支援や青年期教育の必要性について述べた。

第2章では、本研究の中心となる軽度知的障害生徒を対象とした実践研究に先立って、軽度知的障害生徒の置かれた教育環境を確認する上で、小・中学校及び高等学校、特別支援学校の教師たちの知的障害に対する障害の理解及び意識について検討する。検討に当たっては、インクルーシブ教育に関するアンケートの回答結果を活用して行った。回答結果より、知的障害児への配慮の見えにくさから適切な支援に結びつかない状況を作り出す危険性が示唆された。

第3章では、学校適応に困難を示す軽度知的障害生徒の事例を取り上げ、個別面接等の対応を通して、教師との関係性の中で自己を見つめ、将来に向けて現状の問題を自分なりに考え、決定し解決する過程を報告する。異なる要因やプロセスをもつ2事例を検討することにより、幼少期から失敗体験を多くすることで、失敗をしないために決定を他者に委ね自分で意思決定をする

ことなく高等部に入学した生徒や、集団生活になじめず他者との交流の乏しさから自分の客観的認識が不十分な生徒の青年期における教育の課題を確認でき、軽度知的障害生徒への支援の方向性を見い出すことができた。

第4章では、特別支援学校高等部に在籍する軽度知的障害生徒78名に対して学校生活に対する意識調査を行い、進路決定や学校生活への意識についての集団全体の傾向を捉えるとともに、進学時に進学先を自分で決めた生徒とそうでない生徒のその後の学校生活の適応状況を検討した。進学先を自分で決めた生徒とそうでない生徒の学校生活への満足度に全体として違いは見られなかったが、中学校3年生時に通常の学級に在籍していた生徒の多い学年は満足度が低い結果が見られた。また、1年生から3年生へ学年が進むと、生徒自身の学校生活における目標は、漠然とした「社会自立」を目標とする内容から具体的な「自己の課題」の目標へと変化し、自分の現実に目が向けられていく様子が確認できた。

第5章では、第3章及び第4章で得た結果をもとに、高等部入学後の1年間における、学校生活への適応を高め、将来の社会自立・職業自立に必要な自己理解を促す教科「職業」の指導を構想し、実践した結果を報告した。知的障害生徒の自己理解の過程は、健常者のように抽象的な概念を伴わず、生活の中の経験や具体的な事実を一つずつ蓄積して自己を形成していくことを改めて確認した。また、自己を見つめ理解する学習に加え、他者（教師）評価を知り客観的な自己評価を促す支援を行った結果、萎縮傾向が見られた生徒は自己評価を上げることができ、自分を過大評価する傾向のあった生徒はより客観的な評価へと自己評価を変化させることができた。

終章では、本研究のまとめとして、特別支援学校高等部における軽度知的障害生徒の自己理解を促す支援に関する研究の成果を述べた。研究の結果から、以下の結論が得られた。①軽度知的障害の自己決定過程における支援では、従来から行われてきている選択・決定スキルを身に付けるための指導に加え、自分自身の特性や性格、行動を評価する活動を取り入れ自己理解を促すことが重要となる。②特別支援学校高等部においては青年期教育の視点を持ち、職業訓練的な指導から生徒の発達課題に視点をおき、自らが考え判断する学習を通して自己理解を図る支援への転換が必要である。また、本研究の教育実践から指導が難しいとされてきた自己理解の指導について、意図的・計画的に取り組むことで、一定の学習成果が得られることを実証することができた。③知的障害者への支援に当たっては、支援者が十分な情報提供をした上で、パターンリズムに陥らないよう本人を尊重する姿勢を保ち、支援の継続を図るための支援技術の向上が課題である。